(110) 栃木県安蘇郡の吉田鉱山

参考文献（１）を見ることができた。本鉱山が、地図付きで紹介されていた。この項を見て、参考文献（２）を思いだし、ページをめくってみた。川面鉱山の項で、近傍にある吉田鉱山について軽く触れられていた。林道からズリが見えると書いていたが、３０年以上も経ては、現地の様相は全く異なっている場合が多い。川面鉱山の探査記は既報である。川面鉱山の探査時には、吉田鉱山の確認はできていなかった。が、参考文献（１）で、吉田鉱山の位置がほぼ確定できそうである。そういうことで、この文献を手引きに、吉田鉱山の探査に出かけた。現地一体は深い杉林となっており、川面鉱山へ続く林道からは、杉林が目隠しとなって、吉田鉱山への道、及び、ズリは全く視認できなかったのは、当然であった。文献（１）を手引きとした今回の探査で、現地を確認することができた。鉱山の最上部で、露天掘りの跡と、マンガン露頭脈も確認することができた。

本鉱山への経路は、既報の川面鉱山への経路と同じである。栃木県佐野市を東西に走っている５０号から、どうにかして、６６号に入って、北上していく。塩田地区を過ぎ、出川地区に入る当たりで、６６号は川を渡るが、橋の手前で、右側の林道に入っていく。沢に沿った林道を、約８００m進んだ当たりに、車を駐車できる適当な空き地がある。実は、川面鉱山探査時に、この場所に車を駐車させていたことに気がついた。その時には、この場所から、吉田鉱山への道があるとは、全くわからなかった。今回は、草木も枯れて見通しがよい時期であった。ここから、右側の山の斜面の先に吉田鉱山があった。

なを、本鉱山の主要鉱石はマンガン鉱である。また、この鉱山跡を訪れるときには、近接している川面鉱山も併せて訪れるのが、極めて合理的であろう。

探査日　　２０１２年　３月

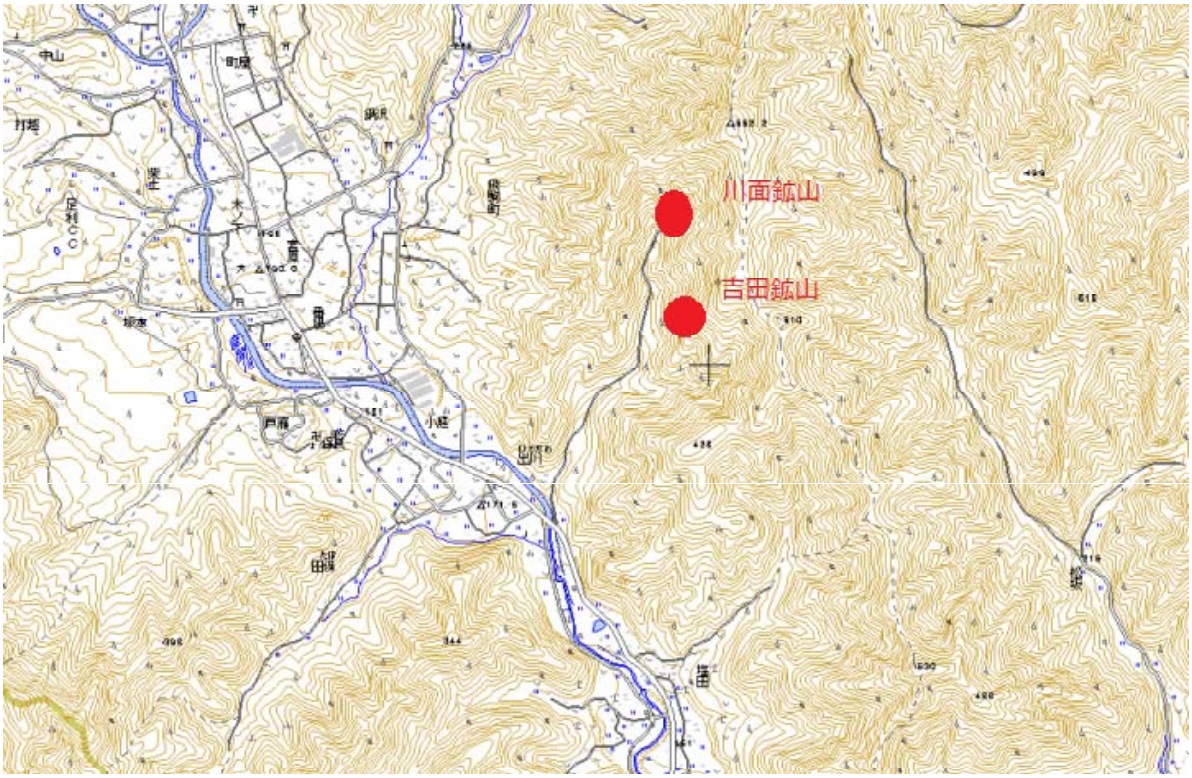


図１　国土地理院の地図サービスホームページより複写掲載。今回探査の結果現地を確認した吉田鉱山と、既報の川面鉱山の位置を示している。

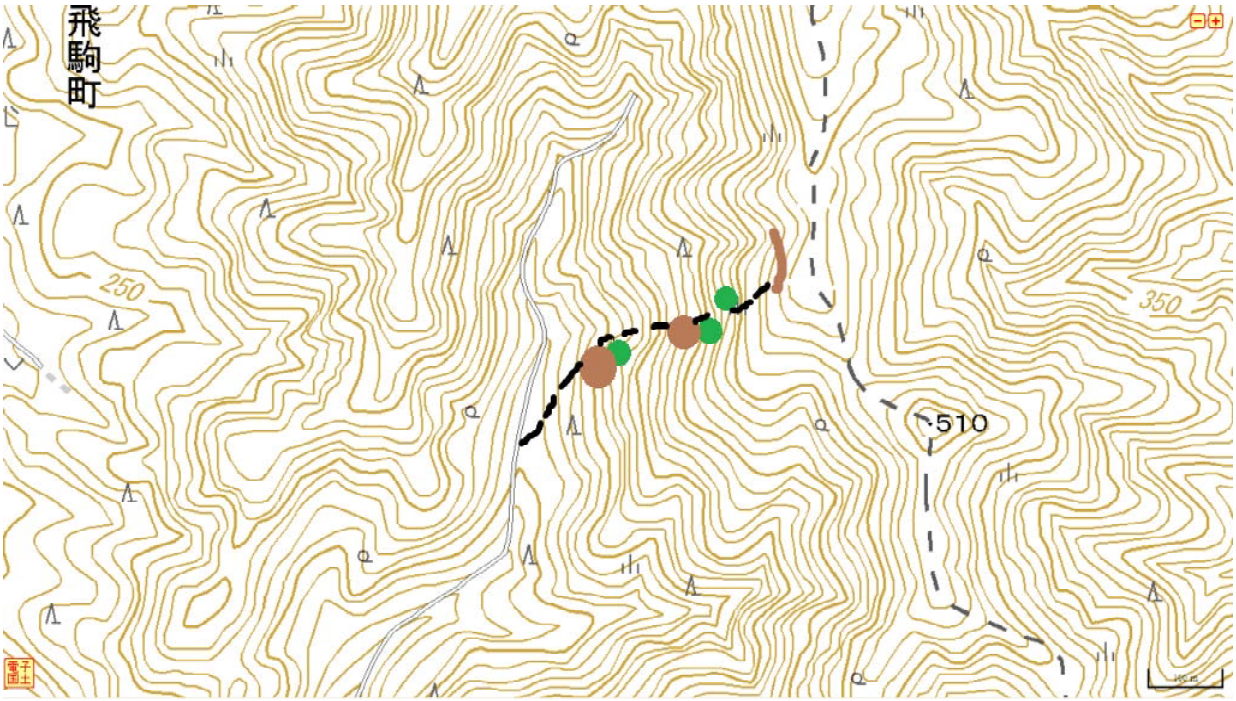
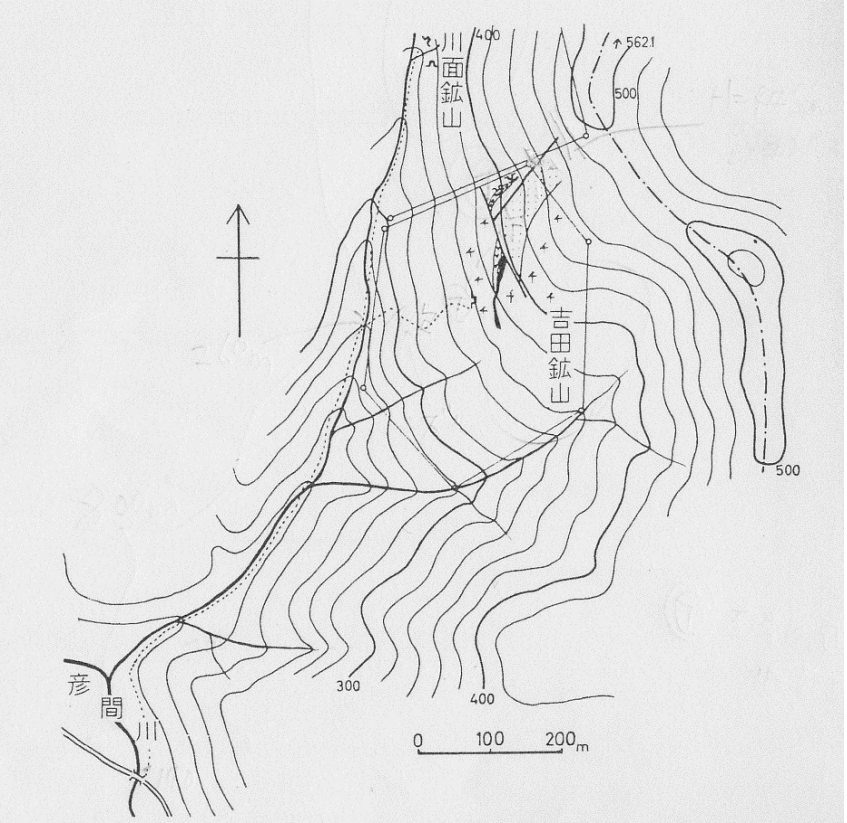


図２　図１の部分拡大図。吉田鉱山の部分だけを描いている。黄緑丸が坑口跡、茶色丸がズリ、茶色線分が露天掘り跡。黒波線で、探査経路を示している。杉林の中の林道は、あちこちに枝分かれして、途中で消えているのが多い。最初のズリまでは、林道で行ける。それより上は、図のように直登気味に登っていくのが、確実である。杉林の中なので、下草がないので、登り易い。



第 258 図　吉田鉱山の地質と鉱床

図３　参考文献（１）より複写。波線で、沢に沿った林道と、この林道から坑口に至る道が記されているが、現在の林道とは、幾つかの点で異なっているし、坑口への道跡は全く確認できていない。この地図は、少なくとも４３年以上前の鉱山図である。古い地図の林道などを、鵜呑みにすると迷うことがある。その後、新しい林道が開削され、古い林道が消えてしまっている場合も多い。注意しすることに超したことがない。

鉱山跡写真

写真１　林道に入って約１ｋｍ付近。左下は沢。ここに、空き地があり、車を駐車できる。林道前方は川面鉱山へと続く。徒歩１０分ぐらいで、左手斜面に川面鉱山のズリが現れる。吉田鉱山は、右手の杉林の中の消えかかっている林道を登って行く。探査は春先に行ったので、草木が枯れて、林道らしい道を視認できた。下草が生い茂っている時期には、登り口を見つけるのは、難しいかもしれない。が、この写真を手がかりにすれば、難しいことはないであろう。

写真２　登り始めてから、直ぐに、右手斜面に大きなズリがあった。斜面には杉が生い茂り、下の林道からはもう見晴らしはきかない。
　これより先は、林道は当てにならない。ズリ斜面を、上へ上へと、いい標本を探しながら、登っていこう。

写真３　坑口跡の１つ。中央付近の黒い穴が坑口跡。

写真４　鉱山跡を、上へ上へと登り詰めた先にあった、人工的なガレ場。参考文献（１）との対比で、露天掘りの跡と確信した。左側の黒い岩盤にはマンガン脈が残っていた。

採集鉱物写真

写真５　露天掘り跡で、黒くて重い石を割った。ピンク色のきれいな破断面が出てきた。マンガン鉱である。バラ輝石かもしれない。
　なを、参考文献によれば、本鉱山の鉱石は、縞状チョコレート鉱を主とする真名小型炭マンである。

参考文献

（１）「日本のマンガン鉱床補遺　後編」、吉村豊文教授記念事業会、１９６９年。
（２）「鉱物最終の旅１　東京周辺をたずねて」、加藤昭＋松原聡、築地書館、１９８２年。